

# 「しらす」うしはく「二語の表明せる

## 根本精神を把握せよ

笈 克 彦

私は皆様のお話を承る積りで出掛けて参つたので、何事も申上げる積りは毛頭ありません。又三矢君の結構なお話も途中から拜聴致したやうな譯で、意見を述べる積りではありませぬでしたが、加藤君からして是非二分でも三分でも宜いから話せと云ふ御命令であるものですから、それをどうも應せぬと云ふのも甚だ失禮と思ひまして、此所に立ちました譯であります。

只今のお話は自分には大變な喜びを以て承つて居つたやうな譯であります。自分は言葉のことは一向存じませぬ門外漢であります。又法律の専門ですが、法律などの研究にも字句のやうなことは極めて不案内の方で、大體の上から觀念を以て、全體の精神と云ふものを全體の中に同化して見やうと云ふことはかりを、始終考へて居る者であります。それを唯一の研究方法とは思つては居りませぬ。實證的研究方法の極めて大切なことも存じて、常に是に背反せぬやうに努めて居りますけれども、さう彼の方にも此方にも手が廻りませぬから、自分では重きを觀念的研究に置きます。否、研究方法としても觀念的に研究することが理學の基であつて、實證的研究は其道具として用ゐられて居るに相違ないと信じて居ります。其基

と信じて居る觀念的見方をして居ります。法律的事に致しましても、今日は相互の討究なども進み、用語の統一などと云ふこともナカ／＼進んで參つて、各省に於て皆統一をするのみならず、更に法制局に於て之を統一し、さうして之を法令として公布し給ふやうな事になつて居ります、それにも拘らず同じ言葉がイロ／＼に違つた意味に用ゐられる場合もある、又根本では全然違ふ意味を持つて居るものが、同じ場合に同じに混同して用ゐられて居る場合が非常に多いのであります、法令輯覽を見ても違ふ意味を持つて居るものが、同じ様な意味に混同して用ゐられて居るものが大變に多い、學者などを見ますと、それこそ銘々思ひ／＼に用ゐますから、一方の人が使ふ意味と、他の人の使ふ意味と同じ言葉でも大變に違ひます、種々雜多になつて居ります、昔から神の惠や、又舊い歴史などに現はれて居る言葉にも、極めてさう云ふことは澤山ありはせぬかと思ふのであります。「しらす」「うしはく」と云ふやうな事に就ても長い時の間にイロ／＼教育も違つて居るとか、自分の思ひ／＼に使ふのであるからして、定めて其邊の所はゴチャ／＼になり得るものであらう、故に之を後世に使つてある用例を調べて見たら愈々以て分らぬ、後世は、上澄め／＼下は自から濁ると云ふ例もあるので、元は違つて居つたかも知れませぬけれども、後になつてから愈々ゴチャ／＼になつてしまふ。平安朝の頃になると何でもかんでもゴチャ／＼になつて居るのでありますから、其當時の用例に重きを置くことは出来なからうかと思ひます、併しそんな臆病なことを言はずに、そんな不親切なことを言はずに、實證的に集めて見て異類綜合し、之を較べると云ふことは

なければならぬ、さう云ふことをしてお出でになる方に對しては洵に難有いこと、思うて居ります、けれども大體の上から言ひますと云ふと、我々が神の惠茲に古典に於て、總てさう云ふものをブレテンテイヅに用ゐる所の氣風を養つて置いて、是に接すると云ふことが必要ではないか、尙ほ「しらす」とか、「うしはく」とか云ふことを明瞭に自覺して現はれて居るものは古事記ばかりである。是も支那の言葉で用ゐて居るのでなく御國の言葉其儘になつて居る、御國では飾と云ふことの上から同じ言葉が二ツ重なるから、此方の言葉は直して置かうと云ふやうなことがあります、さう云ふことは古事記には餘り無いのであります、故に同じ話でも大國主の神様が仰しやるには、云々と申給ひきと重複ばかりして書いてある、重複などと云ふことは何とも思うて居ない、飾をせぬと云ふことである、飾をせぬと云ふことは附加へぬと云ふことで、重つても構はぬと云ふ意味である、そこで「しらす」「うしはく」と云ふ言葉が武甕槌の神様の口から出て居る時も何方でも宜い、重なるから一方を變へると云ふならば、豊葦原瑞穗國は高天原の神様の「うしは」き給ふ所である、それを大國主神が「しらし」て居つたのは不都合であると言はれても宜い譯であります、所がどうしてもさうは言はれない、古事記を味つて見ると、「しらす」とあります所は何時も非常に意味の重いので、今三矢君のお話になつたやうに、天の下を「しろしめされる」、或は高天原を「しろしめされる」、或は海原を「しろしめされる」と申しても構はぬが、「しろしめされる」と云ふ時には非常に大きな意味になる、何人の意思に基くにあらずして、即ち御自分の根源たる所の神様

と御一體になつての御行動である。天照大御神様が高天原を「しろしめされる」のは、即ち伊弉諾、伊弉冉の神様の御心として、伊弉諾の神様の延長として、宇宙其儘々と同じ物となつての御行動であらせられる。さう云ふ時に「しろしめす」と申して居るのでありますから見ると「うしはく」「しらす」との比較と云ふものが力強く響いて来る。古事記全體の精神と云ふものを以て其所を見ると、もう明瞭に「うしはく」と「しらす」とは雲泥の違ひがある。「うしはく」と云ふのは何か自分の物でないやうな物を自分の物のやうにして居ると云ふことが直ぐに思はれる。大國主の神様が悪い事をしてお出でになつたとは決して思はぬ。例へば地主の神様が決して悪い事をしてお出でになるのではない、併しそれは尙ほ最高の神様の御意思に基いて、地主の神様であらせられた大國主の神様、是は大地主の神様であるかどうか論のある所であります。私は大地主の神であらうと思つて居ります、矢張り「うしはく」でお出でになります。「しろしめし」でお出でなさるのでなく、高天原の神様に對して申上げる時には、「うしはく」と云ふことをハッキリ言へる。随つて委任を受けてお出でになると云ふ場合にも「うしはき」給ふと申上げること。は、どうも委任を受けてお出でになると云ふやうに何時も取れるやうに思ひます。船の先に「うしは」いとお出でになると申上げるのも其所を云ふのでありませう、今お話のやうに成程鎮まつてお出でになる。又は率ゐてお出でになる。けれども、御自分が最高の神様として、と云ふ所に力を入れずして、お鎮まりになつてお出でになる。之を率ゐてお出でになる。最高と云ふ所を特別に力を入れぬ場合、さう云ふ時に

多く「うしはく」と云ふことを用ゐて居るのではないか知らぬ、「しろしめす」と申します場合には、是は總てを御自分自身の御人格に基いて行つてお出でになる。若しか御自分自身でないやうに見える場合があつても、それは御自分と御同體の方で、御自分の基礎となつてお出でになる根源である。例へば伊弉諾の神様と天照大御神様と、天照大御神様と天孫瓊瓊杵尊様と、瓊瓊杵尊様と、瓊々杵尊様の其御子孫の天皇と申上げるやうな譯であります、私は文字の言葉のことは一向存じませぬが、「しろしめす」と申すのは、本居先生のお考になつたやうに物を受入れる、今三矢さんから「裁可」と云ふ意味になつて居ると仰せになりましたがさう云ふ譯であります、總ての物を受入れて之を認めてお出でになる、「うしはく」と申すのは是も私は文法のことには存じませぬけれども、本居先生が仰せの通り「うし」として身に附ける、身に附けると云ふ以上は抑々自分の物でないこと云ふことを意味して居る、自分の物ならば附ける附けぬの問題が起つて來ない筈である、唯々「しらす」と申せば足りて居る、所が身に附けると云ふことは即ち自分の物でない、自分の物でないが故に附けることが不當と云ふのではありませぬが、正當の理由に基いて或は何かの理由に基いて、己が「うし」として附けて置く、そこで初めて「うし」と云ふことも言ふ其必要がある。「しろしめされる」御方ならば、例へば天照大御神様であらせられるならば「うし」と申上げることが御行動に就て云ふ必要はない、御人格それ自身に於てはそれは「うし」と申し、又「ぬし」と申上げることも結構でありませうけれども、御行動に就て特に「うし」と云ふことを言ふ必要はないと思ひ

ます、天御中主神が「うしは」き給ふと云ふ、「うし」と云ふことを言ふ必要はない。「はく」と云ふことも必要はない、抑々根本的の「うし」にあらざるが故に、又抑々自分の物と云ふ根本を離れて居るが故に、其所に初めて「うし」として附ける、或は「うしはく」と云ふことになつて來るのではないかと思つて居ります、併し言葉のことに就ての起りは私はどうも皆様のお説を承るより外に仕方がないのでありますが、神の意を全體の氣分の上からして味つて參る時には明白に比較して、是が出て居る、武甕槌神様のお言葉を見る時には、双方の間に必ず重大なる違ひがあると云ふことは、どうも本當である、私は動かすことは出來ないと思ひます、後世の言葉の用例で以て之を否定するだけの證據はどうも擧らぬのであらう、何故なれば後世を自身が混亂して居ると寧ろ考へられるからであります、それを統一する機關も何もない、法制局も何もないのであります。

マアこれ位に止めて置きたうございます、甚だ結構のお話のある途中につまらぬことを申上げましたけれども、マア幹事からの御命令でありますから、御命令をも立つて自分の思うて居る儘々をお話致しました、是で失禮致します。

